



マリッジ・エンカウンター証し集

投げられた火
その実り



マリッジ・エンカウンター証し集

投げられた火

その実り



日本でのファイアーズの出発

日本での責任者ダナン神父と来日した創始者カルボ神父

1981年11月 桐生修道院にて

ME証し集 投げられた火 その実り

目次

ME・FIREESに参加なされた

親愛なる皆様へ

ダナン・マリーリー神父…………… 1

一 家族……………

エンカウンターと我が家

〔その1〕

三木 明……………

5

〔その2〕

節子……………

10

〔その3〕

奈穂子……………

16

息子の結婚

渡辺

明江……………

19

二 夫婦

他人であることのすばらしさ

池田 孝

25

私たちの分かち合い

西山 清

33

MEに参加して

ミッキー・フリーン

45

ー話し合いの大切さー

恵子

MEに参加して

多田 惣一郎

49

ー神のご計画の不思議さ、慈しみー

富美子

幸福の鍵

中沢 章

61

ME、そして今の私達

山野井 正昭

69

富美栄

感謝の手紙

小原 恵利子

75

三 子供

最高の母ちゃんへ

相沢 真広

79

大好きなパパ・ママへ

佐藤 望

81

だから聖書はだめなんだ!!

日置 孝次郎

85

日置氏次男

100

四 故人

家族への別れの手紙

故 塚原 満智子

105

妻の帰天について

相沢 收

107

神のなさる事は、時にかなって美しい

岡 紗綾子

121

125

五 ME紹介

MEへの参加呼びかけ

中村 靖子

137

139

六 論稿

家庭は教会の細胞

― 岩手聖家族会からの報告

日置 孝次郎

151

149

ME・FIRESに参加なされた親愛なる皆様へ

ダナン・マリー神父

マリッジ・エンカウンターの創始者カルボ神父様は、「『私たちは、人間性の中の神性を見つけないければなりません。』というパパ・ピオ十二世の言葉が靈感になりました」と、よくおっしゃいます。

確かに、主は、知識を通してよりも、私たちのごく人間的な体験を通して語って下さいます。その真実を発見するきっかけになった教皇様の言葉にもとづき、MEと、それを含むFIRESのそれぞれのプログラムをカルボ神父様はお創りになりました。

日本における二十年間の、MEとFIRESの驚くべき結果を見ると、まさに私達の中に今も生き続けている体験の大きな力を認めざるを得ないので

す。約千五百人が受洗し、百五十組以上の夫婦が離婚の危険から救われました。又、親と子の数多くの和解もありました。聖職者としての召命などは、その恵みの表れともいえるでしょう。

結局それらは、人間としての実生活を分かち合ってくれたチームを通して、神が生じさせて下さったことと言えるでしょう。夫婦としても・家族としても・個人としても、すばらしい講話が出来る、と思っただけの生活を分かち合った人は、チームにはおりませんでした。

むしろ、福音的な謙遜さをもって、自分達の信仰や生活を分かち合っていくることに協力してくれました。そして、その結果を神にまかせました。ですからその結果は、何とも言えない優れた実りとなりました。

以上のことを考えて、是非皆様にお願ひしたいと思います。MEとFIRのプログラムの体験なさった方々の恵みをまとめて本にすることを今計画しております。そのような記事を書く能力はないし、自分たちは人の心に

響くような体験もしていないと皆様が思ったとしても、ごく当然なことです。何故ならば、私たちの能力や知識を通して、神がご自分の現存と働きを示してくださいるのではなく、むしろ、私たちの人間としてのささいな体験を用いて下さるからです。私たちのそのような体験を分かち合うことを通して、何をなさるのかは神様にまかせましょう。教皇ピオ十二世がおっしゃる通り、人々は、普通の人間的な出来事の中で、神性（神の現存の働き、導き等）を見つけることが出来るのです。

皆様の貴重な体験を、多くの人に分かち合ったださることを期待しております。



司祭のエンカウンター 合同ミサ 1983年5月（桐生修道院）

一 家 族



エンカウンターと我が家

〔その1〕

三木 明

私達がマリッジ・エンカウンター (MARRIAGE ENCOUNTER) に参加したのは、一九七七年一月です。当時、受洗して二年目の妻と子供達 (小学生の長女・長男) とは毎週熱心に教会へ通っておりました。私は信仰や教会は自分とは無縁のことと考えており、教会へ足を運ぶことも全く有りませんでした。そして、毎日仕事に励み?、休日は自分の時間と決めて昼寝と趣味に明け暮れる生活に満足し、家事や子供の事は母親の役目と決めておりました。カトリックの信仰や教会の内容は全くわかりませんでした。妻や子供達が楽しそ

うに教会へ出かける姿を見て、何とはなく安堵感がありました。しかし、外出が多くなった妻に対する不満から教会へ出かけることへの抵抗感がありました。エンカウンターへの参加の話が有った時、内容説明を聞く前から、私は参加したくないと思いましたが、妻の気持ちは説明するまでもなくご想像のとおりです。結局のところ、しぶしぶながら参加することになり、私の心の鉄のカーテンは崩され、私達家族にとって多くの恵みを頂くことになりました。長く続いた家族への不満や抵抗の時代から認知・協力の時代に転心できましたし、何よりも、許せない苦痛から開放され、また家族対話の輪から放流しつつあった自分を救ってくださった思いでした。そして、自分が正しいと確信していた家族との係わり方の誤りに気付かされました。

その後、子供達の受洗、次女の誕生、そして私達夫婦のリ・エンカウンター (RE-ENCOUNTER)、レトルノ (RETORNO) への参加、および子供達のサデ (SADE) への参加を機会に、私達家族の価値観が大きく変わってきました。

それでも私の受洗までには家族への抵抗―認知―協力の時代を経て十三年間を必要としました。やっと家族への仲間入りができた思いでしたが、その数日後には長女が、「一度しかない人生だから世の中のために生きたい」と言って、私の意に反して聖クララ会修道院へ入会し、我が家を離れました。

理想には程遠い我が家ですが、エンカウンターの恵みを頂いて、対話と一致のある家族へ向かって歩み始めたところです。神に感謝すると共に、ひと組でも多くのカップルが参加できますようお祈り申し上げます。



三木 節子

私達の家族は、平凡でごくあたりまえの家族でしたが、一九七五年三月私
 が洗礼のお恵みを頂いてから、平凡であって・非凡な家族へと変わっていき
 ます。「私が見たのは、地上に平和をもたらすためではなく、剣を投げ込む
 ためである。（マタイ十章34〜39節）」というみことばどおり、私達家族に
 変化が現れ始めました。二人の子供（長女、長男）と私は、毎週日曜日は教
 会の御ミサに預かりにでかけます。朝早く起きて掃除、洗濯、そして主人の
 ためにお弁当を作り、私は喜びいさんで出かけます。主婦の仕事はちゃんと
 したのだから、主人の昼食の準備もしてあるのだから、私の義務は果たして
 あると思っていました。主人は一人家で留守番です。以前には考えられない

生活のパターンです。クリスマス、御復活祭ともなれば夜中に帰ることになります。主人はただびっくりし機嫌はわるくなり、夫婦仲も危うくなり、無口とケンカ。子供たちには不安と心配の日々が続きます。でも、私は教会へ行っているのですから悪いことをしているわけでもないし、毎日がむしろ喜びと楽しみ、そして、主人のことなどあまり気にしなくなっていました。

そんな時、私達夫婦に幸運が訪れてきました。私が洗礼を受けて二年目の一月「MEに参加しませんか」と、ダナン神父様とチームの方々がおさそいくださったのです。主人は、「とんでもない、いけないよ」ということでしたが、何度も声を掛けお誘いくださり、特にMEに参加なさった方々のお祈りによって、ガンコに抵抗していた主人ですが、いやいやどうか「うん」と首を縦にふって参加することになりました。

ME参加の二泊三日の集いの中で、私達夫婦はお互いを少しづつ見つめ合い、改めて二人の間には何か有ると、今まで気付かなかった新しい発見を見

いでした。二人の間に有ったはずの夫婦の愛もいつの間にかほこりをかぶり、灰の中のうずみ火のように、かすかに感じられるだけのつまらない二人の関係になっていたので。MEに参加させて頂き二人の上に積もっていた灰は吹き払われ新しい炭を加えて頂き、その上に神の油を注がれ再び二人の間に炎（ファイアーズ）が燃え始めたようです。頑固で無理解、無関心、不機嫌な主人がおもいがけず変身し始めました。無口で無理解、無関心、不機嫌で、不仲な夫婦だった私達ですが、MEから帰ってきたその夜から機嫌のよい、やさしい、明るい夫・妻に変わったのです。二人の子供たちはいつも心配そうな顔で私達夫婦を遠くから眺めていたのですが、安心してそばに来るようになりました。私達は特に対話もなく話と云えば、子供たちの事、それもテストの結果や「明日は遠足よ」とか、「運動会よ」とかの、報告のような話だけです。夫婦だけの会話も対話もなく、よくケンカして、無視して、冷たく悲しい家族でした。しかし、MEに参加した次の日曜日、主人を

含めた、家族全員では始めてのごミサに預かり、本当にこの家族でよかった、この夫、この子供たちとの生活や生きかたを思う時、希望と喜びと期待で心は平安と感謝でした。しかし、それから理想とは程遠い相変わらずの私達夫婦でしたが、夫は教会へ出かけると私と子供たちに対して、また信仰に対しても少しずつ理解を示してくれるようになりました。そしてMEの次の段階であるリ・エンカウンターに参加させて頂きなんと私達家族の中に三人目の子供（次女）を授かったのです。そして次にマリッジ・レトルノに参加させて頂き、まだ未信者であった主人と二人で御父・御子・聖霊に出会う恵みを頂きました。さてその間に子供たちも成長し、長女は中学生・高校生・青年のそれぞれのS A D Eに参加しお手伝いもさせて頂きました。息子は中学生のS A D Eに参加しましたが、高校・大学生時代は教会からもS A D Eからも遠のいておりました。やがて主人も、私がお恵みを頂いて十五年目にやっと洗礼のお恵みを頂きました。その間、神父様、シスター方、そして太田

教会の共同体の皆様のお祈りや励ましを戴き、そのおかげで洗礼のお恵みを頂いたと感謝しております。そして長女は桐生の聖クララ会修道院へ二年前に志願者として入会させて頂きました。また教会から離れS A D Eからも遠のいていた息子も卒業し働くようになるかと不完全ながらも再び教会へかえって来ました。中学生のS A D Eに参加して以来七年ぶりに青年のS A D Eに参加させて頂き、再び神様に出会い、「この瞬間を文字にするのは難しいです。…とにかくびっくりするくらい良いS A D Eでした。参加なさった方を通して神様が働きかけて下さったのです」と新たに神に出会い感謝の毎日をおくっております。そして息子の部屋の聖書は毎日新しいページが開かれています。

私達家族は毎晩神に祈り、感謝し、聖書を読み、分かち合い、お互いの弱さや欠点を知り、良さを認め愛し合い、受け入れ一致させて頂き、成長させて頂き、歩んでゆきたいと願っております。弱く欠点の多い私達家族は理想

とはほど遠く相変わらさずケンカをしたり無口になったり、不機嫌のまま過ごしたり、なかなか前進できません。三步前進、二歩後退、それでも頑張って生きて行きます。

神様の愛に支えられ、主が変えてくださる、より良く和解させてくださる、主に全てを委ねて一致した家族へと変えてくださる、…ことを信じて、今晚もまた不機嫌で、無口になりかけておりますが、それでも息子のギターに合わせて賛美と祈りを始めて居ります。…祈りと感謝をこめて。…



【その3】

シスター・エリザベツ 三木 奈穂子

「さあ、お祈りしましょう。」 そう言って家族を祈りに招いてくれるのは、いつも母でした。誰かがぶつぶつ文句を言っても、急に黙り込んで下を向いてしまおうとも、家族のそんな反応を意に介することなく、聖歌集をペラペラめくって、「どれを歌おうかしら。」： 神様への深い信頼と家族への愛に裏打ちされた、そんな母の姿は頼もしいでした。

今、私は、『家庭の祈り』に対する母の熱心さに、心から感謝しています。特に、私が入会するまでの半年程の間、家族の皆がそれぞれに問題を抱え重たい心を引きずっていました。神様に心を向けるこの一時から、山積された問題を乗り越えるための力を、汲みとることができたことを、誰もが体験し

ました。

十数年前、家族が共に集まって、祈りをする事など、想像もできませんでした。性格や癖、考え方や価値観の違う父と母は、互いに受け入れ合うことができず、苦しんでいた姿を、私はその頃たびたび目にしました。

修道生活を始めて間もなく、私にも難しい時がきました。けれども院長様や修練長様、姉妹方の支えと励まし、また、家族からの手紙の「祈っています。」の一言のおかげで、元氣を取り戻すことができました時、不思議に力が湧いてくるのを感じました。「さあ、もう一度初めからやり直しましょう。」それは、つらい体験でしたが、今、父と母をふり返った時、以前よりも親しく、尊く思われます。父も母も、どんなに難しい時にも、何度でも立ち上ってやり直しました。決して相手を放棄したり、責任から逃げ出したりしませんでした。「さあ、もう一度」それは、この父と母が私に与えてくれた賜り物、とさえ思われるようになりました。

母は、よく祈りました。一人で、家族で、婦人の集まりで……。この祈っている姿が、私に、『祈りに力がある』ことを教えてくれたのだと思います。「神様には、おできにならないことはありません。」この確信を抱きつつ、私も、私の道を歩みつづけていきたいです。



息子の結婚

渡辺 明江

息子が結婚しました。平成二年十月少し風の強い秋の日でした。神父様はじめ友人、教会関係の人達に見守られ結婚の誓約をする二人の声を聞きながら、私達家族の受洗のときを思い出していました。

私と息子の洗礼は息子が小学三年の夏聖母の被昇天の祝日でした。私は近所のクリスチャンの人の家で行われている勉強会にさそわれ勉強しているうち、どうしても洗礼がほしくなり、息子はプロテスタントの集りからカトリック教会の土曜学校へと移り、同時に受洗しました。その間夫は教会への送りむかえは積極的になってくれましたが、こと自分自身の洗礼はのんびりと消極的でした。

あれは軽井沢で行われた家族のエンカウンター（ファミリー・エンカウンター）のときのことです。息子が三人の分ち合いのとき「お母さんと僕は死んでから同じところにいけるけど、お父さんは一緒にいられないのは寂しいから早く洗礼受けてよ」と言いました。実に子供らしい素直な発想ですが、その時夫が「そうだな家族のためにも洗礼を受けたほうがよいかな」と言ったのです。そしてエンカウンター最後の日出席者全員の前で宣言し、翌年の復活祭で神の子として生れかわりました。私と息子が受洗してから八年たっていました。それから私達家族は時々苦しみながらも同じ価値観を持って生きてきました。不安定な中学時代、高校受験、そして公務員の仕事に就いてから困難なときに出会うといつもそこに神がいて力を与えて下さったのです。エンカウンターでは自分をよく知り、完全でない自分を愛すること、異なった部分を持った相手を受け入れること、互に愛すること、その上で同じ価値観を持つこと等、エンカウンターで知らされたことが私達家族が生きる

上で大きなエネルギーの源になりました。

息子も仕事がいぶなれた頃一人の女性を家につれてくるようになりました。明るく素直で他人の悪口をけして言わない素晴らしいお嬢さんです。二人ともスポーツ好きですから、スキー、テニス、バトミントンといつでも真っ黒に陽にやけています。夫も私も「僕この人と結婚します。」という息子の言葉を今日か明日かと待っていました。そして家族や周囲の人達の喜びのうちには婚約がととのい、明日はいよいよ結婚式という夜、心ばかりの私の手料理をかこみ夕食のときです。日頃無口でテレ屋の息子が「二十五年間本当に幸せだった、お父さんとお母さんの子供で本当によかった」と泣き出してしまったのです。私達も「あなたのような息子を持つて親として幸せでしたよ」といいながら涙がとまりませんでした。翌日一足先に式場に行く息子が私達に「夜になったら読んで下さい」と一通の手紙を手渡してくれました。

厳肅な中にもなごやかな式も終り一日のスケジュールがすみ帰宅した私達

は息子の手紙を開きました。

その手紙には暖い家庭への感謝と、変らぬ愛への感謝そしていつも両親から愛されていたと感じていたこと。式も目前にせまった一週間前頃から仕事先からの帰り道、車の中で二十五年間を振り返ると、いつもそこに父と母がいて必ず自分がいた、幸せだったとしみじみと思ったこと。妻になる人も素晴らしい女性だから二人のように（私達のこと）明るく仲の良い夫婦になるから安心してほしいと書いてありました。

私達は決して百点満点の親ではありませんでしたが、その時々誠意を持って接してきました。ですからこうして私達が常に息子を愛し慈しんできたことが彼に伝わっていたと知ったとき、こんなに大きな喜びはありませんでした。人がよく「一人息子さんが結婚して寂しいでしょう」といわれますが、寂しいと思ったことは一度もないのです。もう親としての役目は終わったのです。彼には心をかけ助け合い愛し合う人がいるのです。これからは二人で歩

いて行ってほしいのです。私達がすることは、若い二人を一对として愛してゆくことだと思っています。私達親子がまよいながらもよりよく親離れ、子離れできたのも、いくつかのエンカウンターの中で不完全な者同志がお互いをせめないで受け入れ合うこと、相手を変えようと思わず自分が変ることなどを知り少々ガンコだけれど、心の広い夫が我ままで早トチリの私をいつも妻として愛してくれた実りだと思っています。これから善いことばかりではないと思いますが、神の大きな力とたくさんの友人の祈りを思うとき何も恐れることはないと思っています。



カルボ神父とライアン夫妻によって
「顔と顔を合わせて」が紹介された集い
1984年5月（桐生修道院）

二
夫婦

他人であることのすばらしさ　―いま夫婦が面白い―

池田 孝

たいていは女房が先に起きている。カタコトと珈琲ポットなど取り出した
りしているところへ、これもたいていはパジャマ姿の私がぬっと現れる。彼
女が気づいてふり返る。そこでどっちからともなく『お早うございます』と、
挨拶のようなものを交わす。

実はこれ、毎日をぎゃあぴいと戯れ合うみたいに暮らしている二人にして
みれば滑稽に近い、それほど厳肅なのである。だが当人たち、少しもおかし
いとは思わない。そこが可笑しい。こういう奇妙な他人行儀で、わがやの一
日が始まる。

朝の祈りの後に、ではなくて先ずその前に珈琲タイムをもつ。神様が先よ、

などとは言わない。不埒である。しかしこの一致（？）がたまらない。

小卓を挿んで女房がソファ、私は揺り椅子、ゆったり体を沈めて珈琲を啜る。どっちからともなく話題が出る。『ソ連の人たちが苦しんでいるの物価でしょ？ 政変とどこに接点があるのかしら』『頂いた高木慶子さんの本だね。ある時彼女が……』『パパは寝ちゃったけど、夕べあのあと黒柳徹子に抱かれたアフリカの……殆んど骸骨よ。あたし未だ映像が消えてないの』『きのうのあれ、考えてみると俺がわるい。完璧主義って罪深いな。人の手抜かりを許せない……』話題は尽きない。

私は朝のこのタイムが好きだ。トークの内容は次の、朝の祈りで奉獻される。いつからか交代で祈りの主導を勤めるしきたりになった。――あれ、今日の祈りは俺の番？ 布団を出ないうちから少々気が重い。女房もどうやら同じらしい。しかしこの小さな緊張がいい。聞く側に回った日はなお楽しい。モラ織りの上に載ったイエス様とマリア様とランピオン、小さいな祭壇に

向って女房と神様の対話に心を併せて祈る、いいものである。

もう四十年も昔になる。海の匂いのする街の小さな喫茶店に賤子（しずこ）さんと孝さんがいる。二人は互いにそう呼んだ。あの頃はお互いに他人だった。他人だったからこそ惹き寄せられることの不思議さが眩しかったのだ。二人はたいして意味もない言葉を交わしては心をときめかせていた。

結婚してから呼び方がハシーコVになった。さんが抜けたが、しかしまだこの頃には二人の間に他人性があつた。私のいうハ他人性Vとは、お互いの意識の中でお互いの人格がもつ尊厳を認め合っている状態のことである。

長女が生まれて満一才を過ぎた頃から私達はパパとママになった。長女の呼び方に合せたのだ。私の心に不服が宿った。孝さんと呼んでくれることへの、甘ったれた郷愁が心の深層にあつた。「私」とはそういう馬鹿げたロマンチスト、それが私を墮落へと誘っていく。

幼い子が三人になる。両親は共に教師、子守は雇っているものの帰宅は五時すぎ、さあそれからが戦争だった。そういう毎日の渦中であって、私は『父親』をサボり始めた。カバンを持ったまま家に帰らず、華やかな巷で酒をのみ、女と踊り、外顔のいいへぶりっ子Vで夜の街にロマンを追い、既に翌日となった深夜に帰宅する。乱行は実に十年に及んだ。

今から十一年前、夫婦のエンカウンター（マリッジ・エンカウンター）に参加した時だった。結婚来初めて私は自分の幼少年期のことを女房に話した。父は私が生まれてすぐ離婚、母は屋根裏部屋を借りて和裁の賃仕事、三日に一度は弁当がなく、学校の昼食時間は校庭の樹の上、青い空に泣いて呟いた。『オトナになったら旨いもの食ってやる！ いい服きてやる！』女房がそれを聞いて泣いた。そして私を許してくれた。しかし私の虚栄（悪）を支えていたインフェリオリティ（負い目）が何であろうと、それによって私の犯した罪が薄れるわけではない。それどころか、私の霊名の聖人アウグスチノ

のように、犯した罪によって気付くことができた父なる神の愛に応えて生きたい。『遅れて来たあなたにも一デナリオをあげる』神に感謝。

珈琲タイム、祈り、ようやく朝食である。食前の祈りの最中に食卓の下で彼女の足に足をのせたりする。すると彼女が別の足をさらに重ねてくる。そして睨めっこをする。呼吸はぴったりだ。こういうハ夫婦の解からなさVのことをこの国の人はハ犬も食わないVという。結婚して四十年。波瀾の後のこの嬉しい犬も食わない不行儀、主よあなたに感謝。

かつて不徳の長い歲月、女房は単に所有物でしかなかった。互いが他人であったこと、つまり互いの尊厳を再発見することを促してくれたのはMEであった。朝食のあと、またぎゃあびいの一日が始まる。しかし朝のセレモニーで戴いた靈性はきっと私達の一日を支えてくれるに違いない。いま夫婦が面白い。

私達の分かち合い

西山 清・恵子

夫―私の家族は、妻と社会人の長女、大学三年の長男、高校三年の次女の五人家族です。

私は現在、長野県の松本郵便局に勤務、单身生活をしております。

二 規
―今年（平成三年）の二月の三連休のことです。松本は家から遠いので、なかなかゆっくり帰る機会がなく、今回は家族と会うのを楽しみにしていました。九日の夜は、私達が仲人した若夫婦、兄貴夫婦達が集まり、楽しい一夜でした。翌十日は、御ミサに行き、午後は妻の父が久しぶりに来て、夕方迄過し、夜は娘達は出かけたので、妻と二人で夕食を食べました。食後間もなく私は仕事を取り出し黙々と始めました。十時頃になって、突然妻が「つま

らない」とつぶやきました。

妻―主人は、年末年始忙しく、今年のお正月は家に帰らなかったのもこの日を楽しみに待っていました。そしてこの日、勤めを終え、来客七人を迎えるので、娘達からも手伝ってもらい、何とか間に合い一同食卓を囲んで話に花が咲きました。翌日は、御ミサから帰ってくると、時間は、あつという間に去りました。数日前、主人は「この連休温泉に行こうか」と言いましたが、私は「もったいないから家でゆっくり過ごそう」と言っていました。で、今晩は、のんびりとお茶でも飲みながら話したいと思っていました。それなのに主人は黙って書類を出し書き始めました。私は「ああ、主人は職場でのアドバイザーの試験があると言ってたからその勉強なら仕方がない」と思っただけでしばらく待つことにしました。私も趣味の試験勉強や、実家の決算と確定申告もあり時間が欲しいでしたが、主人がいる時は、せずに二人の時を

大切にしたいと思っておりましたのに、主人が始めたなら、私一人とり残されたようでした。それなら終る迄と、私も帳簿を広げました。そのうちに疲れきて、急につまらなくなつてきて、たまにしか会えないのに、又明日から一〜二週間離れて暮らすことになるのにこんな生活で良いのかと考えると、情なく腹が立ってきて、「つまんない」と言ったのです。主人は「何がつまらないんだ」と言います。「だってせっかくの時間をゆっくりと過ごそうと言つたのに！」そして主人は「昨日、兄貴達が来てくれて楽しかったし、二人がこうして側にいるだけでいいじゃないか！何が不満なんだ」と言い、私は「昨日は久しぶりに多勢顔を合せて楽しかったけれど接待もあつたし、それと夫婦の時間は別なのに」と言うと、「じゃあ『お父さん、仕事をやめて』と言えばよいのに」とお互いに主張し始めました。私はこれ以上言うとも悪化すると思ひ、あきらめて寝ました。

夫―楽しい連休を過すつもりが、この瞬間に私達の心が離れてしまったことを直感しました。アンケートの仕事は、突然飛び込んだものだし、妻は私を解ってくれると思っていたのに、急に怒り出した妻を理解できませんでした。翌日の朝食はお互いに無言に近い状態でした。私は再び仕事を取り出し、妻は台所に入りました。私の気持はなかなか治まらず私を理解してくれない妻に腹が立ち、せっかく帰ったのになんという有様だ、こんな雰囲気の中にいたたまれず、妻に無言で家を飛び出し、松本へ帰りました。

妻―主人に不満を持ち心の重いまま、松本に帰って一人で食べる夕食、せめてお弁当を持たせようと台所に入り、出来上って部屋に入ったら、主人の姿が見えません。ちょっと外に出たのかしらと思いましたが、カバンがありませんでした。「あっ、黙って帰った」と感じた瞬間、とてもショックでした。

主人がこんな行動に出たのは始めてでしたが、私も夫婦げんかして実家に帰りたと思ったこともあったけれど、それでも一度も帰ったことが無いのに……。怒りを通りこし出られた側の嫌われたみじめな思いで一杯でした。それでもいつもの時間の列車に乗るかと思つて駅に行つてみました。どこにも姿が見えませんでした。近い所なら追っかけられるものを、今日程、松本が遠く感じたことはありませんでした。

「渡せたら主人の気持が変わつたかも……。でも渡せなくてももともとのお弁当なのだ」と、心でつぶやきながら、駅の階段を降りていましたら、涙がにじんできました。

多くの夫婦は一つ屋根の下に住んでいるのに、私達は離れていて、こうして会えながらこんなになつてしまつて……。どうしてこんな思いをしなければならぬのか……。本当に悲しみて胸が痛くなつてきました。

そうすると月「いつも喜こんでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのこ

とについて感謝しなさい」と歌声が心に響いてきたのです。ああ、そうだ感謝しよう!! 「神様、昨日からのこと、そして今オニギリを渡せなかったことをも感謝します。」この時は、不思議に心から感謝できました。そして、主人だって今、列車の中でいろいろな思いでキツト心が苦しいだろうに思えて「どうぞ神様、私達をあわれみください。すべてをあなたに委ねます」と祈れました。すると先程の悲しみが和らぎ、気持が明るくなり家に戻れました。

夫―松本迄の四時間の列車の中では、最初、気持がむしゃくしゃしていました。やがて落ち着きを取り戻し、妻とこのままでは良くない、どうすればよいか、あれこれ頭の中を思いめぐらしました。いつか「天にまします私たちの父よ：」と祈り始めている自分に気がきました。私の心は神に助けを求め始めていたのです。その夜、ふとテレビを回すと間宮林蔵の番組でした。

彼は五十才の時に役人生活を辞め、日本地図の作成に生涯を捧げました。一つの仕事に全力で打込む姿の美しさ、迷わず前進する熱意に感動を覚えて涙がこぼれました。その時、私の中に「私も今年、五十才だ。もっと大人にならなくてはいけない、頑なな自分を捨てて、すぐ妻に率直な気持で和解しなければ」という強く熱いものが込み上げてきました。あっ、これは神様が、テレビを通して私に語り、何をやるべきか導いてくださっていると感じました。私はすぐ妻に電話をかけ、「せっかくの三連休こんな結果になってすまなかつたね。今神様の働きがあつて私の固い心は砕かれたよ、自己中心的で思いやりが欠けていたこと、無言で松本へ帰ってしまったことを謝りました。

妻―私は夫の仕事を優先して従うものという古い考えの為に遠慮し最初に自分の気持を言わないで態度や行動で不満をぶっつけてしまったことを謝り、今度から素直に気持を伝えると告げました。主人からの電話でゆるし合うこ

とができて喜びにあふれ、一致の恵みをくださった神様に感謝でした。

夫ー私はおにぎりを駅迄届けてくれた妻の気持ちを思うと涙が浮びました。

この夜の対話により再び心が通じ合いました。

「あなた方の知らない人が、あなた方の中におられます」（ヨハネによる福音一章26節）

神様はいつも一緒におられ、私達を導いてくださることを感じ幸せでした。

ーここで私達の家庭の祈りについて分かち合せて頂きます。

私達は十年前にMEに参加しました。

チームの方々が家族で祈り、み言葉に生かされている姿に感動し私達も始めました。

子供達の素直な祈りに教えられ、ゆるし合い、そして、家族で祈った実り

二 規

に父が洗礼の恵みを頂き、父が孫を導くに至りました。子供達が祈りの時にいやがったり、つつついたり、笑ったり、「神様も一緒に笑ったよ」と言っていた風景も今はなつかしく想い出されます。

現在は、家族か三ヶ所分かれて生活しており祈りを通して家族が一致出来ますように、夜十時に祈り合っています。それから、み言葉を大切にしています。子供達も聖書に親しむようになりました。特に末の娘は、受験期や悩みのある時、み言葉に励まされ、支えられてきました。そして、高校生サデーに奉仕する機会が与えられたり、今年、赤ちゃんの代母を頼まれた時、資格が無いと断りましたが、すぐ聖書を開いたら「あなたの道を主に委ねよ、主に信頼せよ、主が成し遂げてくださる」―詩編三十七・5―で代母を引受けました。プレゼントに赤ちゃんが大きくなった時読んでもらうんだとお手紙を書きました。

その内容は、自分も幼児洗礼であり、洗礼を受けていない方がよかったと

思った時期もあった、でも今は洗礼を受けていて本当に良かった。自分に神様が助けてくださり、ともうれしく喜びに満たされると書きました。後日、家族から、皆（未信者も含め）の前で手紙を読みました。皆が感心して、うれしかったと伝えてくださいました。

私達は新潟教区大会でこれらの体験を分かち合いました。

神様は、突然このような場を私達に与えられ感いましたが、家庭の福音化は、夫婦・家族の一致が基本であると思い、M Eの精神を少しでも伝えることができればと願って、神様に助けられ発表することができました。

夫―M E参加前は世間的な価値観で、仕事を優先して、家庭、子育て等妻まかせでした。参加後、新しい体験と恵みを頂き、価値観も変わり、一致の喜び、神様の愛を感じるようになりました。

妻―MEに参加して、自分に出合いました。参加前は、妻、母、P.T.C.として、∴らしく、∴あるべきという生き方で、感情も押えていましたから、狭い考えで人にも厳しいでした。感情を大切にし自分を正直に表わすことによって、人の苦しみや痛みが以前より深く感じられ、ありのままの他人を受け入れることが少しづつできるようになりました。又、私自身心がとても自由になり、神様の愛を感じ、信仰の喜びを味わせて頂いております。

” 神に感謝、神に栄光 “

MEに参加して　―話し合いの大切さ―

ミッキー・フリーン

恵子

妻…私達がMEに参加したのは、結婚して三年目、上の子が1才半の時でした。

結婚して一年半後、それまで英語講師をしていた主人（ミッキー）が大学院に入ることになり、私達は静かな農村地帯で二年間を過ごしました。

子供もここで生まれたのですが、今まで二人しかいなかった生活の中に子供という新しい仲間が増え、お互いの関係がどうもうまくいかず、ぎくしゃくしている時でした。

愛し合って結婚して、愛の結晶であるはずの子供なのに、どうして一人増

えただけでこんなにも二人の関係がおかしくなるのだろうか？ と、その時は子供のせいにしていました。

またこの時期に、三人で車で能登の方に旅をしたのですが、お互いの価値観の違いから、旅先で大きなけんかをし、一時はどうなるかと思うほど、辛い思いをしました。

今思うと、すべては夫婦間での話し合いがまったくない生活だったということ強く感じます。それを子供のせいにして、見つめ合うことを忘れ、また相手の求めているものも理解しないでの旅は、うまく行くわけがありませんでした。

その旅行でミッキーが求めていたものは、勉強や、英語教師のアルバイトからのストレスをいやすためのやすらぎの静かな時間であり、私が求めていたものは、たいくつな農村地帯から、もっと刺激的な街を求めてのエキサイティングな時間でした。

当然、行きたい所、時間の使い方も大きく違ってくる。

夫…私達は、車もない小さな島に渡りました。そこは、私が育ったグアムやハワイのような自然があり、求めていたものがそこにありました。が、恵子は早く帰りたいと言い、私のことに理解してくれないことに強い憤りを感じ、恵子の財布からお金を取り、「子供を連れて、一人で帰れ！」と言い、私は他の民宿に移るつもりでした。

妻…その時の、いきなり突き放す態度にすごい不安を感じ、一方的にお金を取って、この場から逃げようとするミッキーに「卑怯」と言いながら泣いていました。

二人で話し合い、価値観のずれに気づき、抱き合って泣いたこと、また、その時不思議と「けんか」という嵐が去った後の、何とも温かな気持ちをや

く憶えています。

MEに参加して、チームの方々の夫婦のすれ違い、それを乗り越えるむずかしさ、そして乗り越えた時の神様からの大きな恵み。そういうビベンシアを通して、話し合い、理解することがどんなに大切か、また、そのことが、どんなに二人の気持を一致に近づけ、愛を深めるか、そして、生活の中にも神様が生きていらっしゃるのだーということを知られました。

お互いに不満を感じていた時のME参加ただけに、子供なしの2泊3日の二人の見つめ合いは、新鮮で胸トキメク新婚気分に戻してくれました。

それでも、まだこりずに言い争いをする私達ですが、MEで学んだ「話し合いの大切さ」を心に止め、理解し合い、泣きたい時は二人抱き合って許し合える夫婦になりたいと思います。

MEに参加して　―神のご計画の不思議さ、慈しみ―

多田　惣一郎・富美子

今から十五・六年前の私達の家庭の状況を今、振り返ってみると、神の御計画の不思議さと慈しみをつくづく感じさせられます。

当時は私が五十才、妻は四十六才の頃でした。会社（婦人服卸）の三階に住居があり、中学生の長男と小学生の次男と長女が居り、私は年齢的にも最も仕事に打込める時期でした。

私は出張が多く、妻は育児や家庭のことが主でした。遠距離の夜行列車で疲れてはよくお酒を飲んでいました。とにかくファッションを追いかけることに夢中で、家のことを振り返る余裕はあまりなかったように覚えています。

日曜日毎に、教会へ家族で休まず出掛け、行事中心の信徒会を手伝ったり

夜遅くまで役員会に度々出ていましたが、家に帰ったら聖書は閉じたまま書棚に、家族揃ってお祈りをすることは正月やお盆等を除いては全くと言ってよい程していませんでした。

夕食を家族揃ってすることは、出張以外の時は大体していたように記憶するのですが、食事中の話は決まって仕事のことが多く、妻からあなたの方では利益があがらないとか、仕事上のことからはいえ、だまって女性のデザインとよく東京へ出張し時には泊まることもあったりしてお互いだんだん心は離れてしまっ、はげしい争いとなりました。くり返し続いて進歩などみられませんでした。

子供達は又始まったとばかり、醜いやりとりを見聞きしたくないのでしよう、自分達の部屋に行ってしまう。時には寝床に退散してもなお深夜まで続いたこともありました。

子供達が大学を出てから、「お父さんとお母さんの喧嘩が始まると嫌だっ

た。僕達は部屋に籠っても落ち着かず勉強する気にもなれず、マンガ本を読んだり、ラジオを聞いて気を紛らわせていた。その時の影響から、今でも心から親に対して自分の気持を言えない傾きがある。」と分ち合ってくれて、初めて自分達の悪い影響を小さな子供達に与えてしまっていたことに気づき強く反省させられました。

私は自分さえ潔癖であれば謝ることはない。「折角女性を専門職に育て始めたのにやめることはない。」と言い続けても平行線で一致することはありませんでした。余りの苦しさに、それでは教会に行って神父様に聞いて貰おうじゃないかと、神父様を煩わせたこともありました。妻は神父様に何か長々と訴え、私はお聖堂で祈っていました。

神父様は私に「奥さんの言うこともよく聞いてやって下さい。」と言われ、その頃カテキスタの方が教会に泊って居られ私の信頼する方でしたので、「私は今何のために生きているのか解らない。」とぼやきましたら即座に、

当時信徒会長をしている私に「だめじゃないの、あんたがそんなこと言って」と本気で怒られました。

間もなくして、桐生の一週間の黙想会の途中から私達夫婦にお手紙を頂きました。それは夫婦のための良いセミナーが桐生の修道院であるから是非行ってみられたらという内容でした。何時もは、おいしい食事をしようという時以外は反対意見が多く、忙しい仕事を二日間も休んで行くことは仲々無理だと思っていましたら、不思議にすらすらとまとまってしまいました。

元ブラザーやシスターだった人達で病気のため退かれ、結婚生活をなさっているグループの中に入って二泊三日を過し、明るい希望が私達の中に芽生えて来ました。

若しもっと詳しく知りたいのなら、最近専門的な会がありますからそこに出て下さいと奨められました。それがマリッジ・エンカウンターだったので、セミナーから帰り、暫くは思いやりの気持も少しは出て来ましたが、長く

二 夫婦

は続きませんでした。又々時々陰悪な状態に逆戻りしたりしました。桐生の修道院で神の深い慰めを受けたことが忘れられず、妻が少ししぶるのを説得して、昭和五十年初めてME（マリッジ・エンカウンターの略）に参加致しました。

私達より若い、チームカップルと呼ばれる人達の日常の体験を聞き、課題を与えられて反省し書きとめ、二人でそれを分ち合い、休憩時には他のカップルとも話し合ったりして、二日目には自分の中で心の変化が起って来ているのに気付きました。

最もショックだったのは、チームカップルの方々が日常聖書を読み自分達の生活の中に活かし、キリストのみことばを信仰の心でとらえ、毎日の指針としている努力と、それによる和解を繰返し、よく対話し、恵みに感謝していることでした。

これまでの神から、私達と家庭の中でも何時も共に居て下さる神様、心の

扉を自ら開けば瞬間的にキリストが私達の心の中に入って来られるとも聞いて、私のキリスト教観は一変しました。

帰って早速夫婦で朝晩の祈りを聖書を開いて始めましたが、仕事の忙しさを理由に長続きはしませんでした。

三回程MEに参加した時、恵みを頂きました。炊事やその他の仕事を終えてから祈ろうとして、疲れたり、夜遅くなったりしてしまいましたのを、一日の始めと、仕事から家に帰った時、先ず二人で祈るように変わりました。その後で食事を作り始めると、夜遅い時は十一時を過ぎることも当時は多かったのですが、み言葉に慰めを得て、互いに先程までの疲れが癒され、夫々分担して深夜でもなごやかな食事をする事が出来るように徐々に変えられました。その頃長男は就職で、他の二人は大学で、何れも東京に住み年二回の休みの時だけ帰って来ました。帰ってみるとよく喧嘩ばかりして、家で祈る姿など滅多に見たことがなかったのに、朝夕家庭祭壇の前で聖書を朗読し、祈っ

ているのを見て、始めは恥しそうに後に座り、読みを間違えたと言ってはくすくす笑ったりしていました。やがて私達と一緒に祈るようになりました。今では二人の孫がいて、祈りの時少しも静かにしてくれませんが、祈る習慣は口で教えるものでなく、姿を見て覚えるものとしばらくは辛抱して全員で祈るようにしています。

祈りを必要としている人や、家族の病気や怪我を癒して頂くように油を塗って真剣に祈る時、小さな孫もその時だけは神妙に、祈って貰う人の顔を見上げ静かにしています。そして次に病気になった者が出ると、油のビンを持って来て祈ろうと催促します。

二人の関係も仲々変らないようでいて、始めてMEに出たときに使ったノート等を見ると随分変えられていることに気付きます。今に比べると如何にもギクシャクしていて、互いに相手の弱い点のみを指摘して直すように言ったりしており、自分をよく見つめ自分の弱い点を認め、相手の弱いところを

受け入れようとはしていませんでした。「妻とは親しく心を打明けて話すことは出来ないが、神様とは親しくできる」と思い込んでいました。

然しその後も日常気持ちのすれ違い等時々あります。

昨年のも二半ばのことでした。毎朝会社に長男の運転する車で三人一緒に行くことが多いのですが、洗濯物等は会社の近くのクリーニング店に持って行った方が便利で利用していました。始めの頃は夫々自分のものを持って行っていたのですが、何時の間にか車が会社の駐車場につくと、仕事熱心な妻は「これ持っていくて。」と私の膝の上にドサツと置くなり、すたすたと会社のドアの錠を開けに行くようになりました。時には妻の物だけの時もあり、多い時は数千円も支払わせられたりして、何時も押し付けられているような気がし、少しは「今日は急ぐの、これ済みませんがお願い。」とか何とか云いようもあるんじゃないかなろうかと不満がだんだん溜まり、「今度このような態度に出たら行ってやるもんか。」と思つて居りました。

それから何日もしない或る朝、皆で朝食をしている時に娘が孫を連れて泊りに来ていて、「孫がチャンチャンコを汚してしまったの。急ぐからお婆ちゃんお願いします。」と出されたので私は咄嗟に「又俺に頼むんだらう。何時もお前の分も頼まれっぱなしで、お金だって皆私が払ってるんだからね。」とつい溜まっていたものが吹出してしまいました。

妻はムツとなって、「洗濯代を全部払ってるなんてよく云うわ。」「俺の方が圧倒的に払ってるよ。」と譲りません。すかさず長男の嫁が「こりゃ駄目だ、お父さんとお母さんとよく分ち合いをしなくっちゃ。」と云われてしまい、口をつぐんでしまいました。

会社に行っても一日中その事が気になって、面白くありませんでした。私も大人げない言葉を口にしてしまったことを悔みながらも、この際だからこの問題についてよく話し合う必要があると思つて居りました。些細なことでも早い中に分ち合うべきだったと思つても後の祭りでした。その夜寝る時間

になっても、「あんなことを皆の前で云うものだから、長男夫婦に笑われるし、娘にも喧嘩しているところを見せてしまって、私だってちゃんと自分の物位自分で払ってるんだからね。」と今朝の話を繰返すだけで互いに近寄ろうとはしませんでした。間もなく妻は眠りについた様子ですが、私は寝れませんでした。こっそり起きて一階の祭壇にローソクを灯し、自分の弱さと妻の弱さのために祈りました。

しばらくして聖書が無作為に開いたところの最初に目にとまったところから静かに読みました。ヤコブの手紙四章一節で「何が原因であなた方の間に戦いや争いが起るのですか。あなた方自身の内部で争い合う欲望がその原因ではありませんか。」とありました。私の心をぐさっと刺貫かれたように感じました。私は本当に弱い者です。あなたなしには善い方向に向うことは出来ません。イエズス様赦して下さい。力を与えて下さい。と暫く祈りました。翌朝何時もより早く起きて祈ろうとしましたら、妻も起きて来て私の隣に

座りました。共同の祈りをする前に心がうながされ、妻の手を取って「昨日は済まなかったね。」と妻の目を見つめて言いましたら、「私こそ。」と目に涙を溜めて手を握り返しました。しばらくは二人で涙にくれました。私達の間イエズス様が立っていて下さり、心からの一致を与えて下さいました。身も心も清められた感じがして感謝の祈りを捧げました。主に助けられて一致出来たことは度々あり、時々信者の皆さんに分ち合ったりしています。

幸福の鍵

中沢 章・礼子

表題の「幸福の鍵」は曾野綾子の随筆「幸福の三個の鍵」から無断借用したものです。

この随筆の主旨は「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」（一テサロニケ五章十六節）というパウロの呼びかけこそ、私たちが本物の幸せを手にすることが出来る三個の鍵ではないかということでした。

私達夫婦はこのみ言葉には思い出があります。数年前、私達の生活に行き詰まりを感じて参加したマリッジ・エンカウンター（ME）で食事の度毎に歌われたみ言葉であったのです。私達の毎日はこのみ言葉とはまったく正反

対でしたから、はじめは相当抵抗感がありました。しかし、何回も繰り返し歌っているうちに、このパウロの呼びかけこそ、私達の生活を改造する唯一の「キー」と思われるようになりました。

MEは離婚的危機に陥った夫婦が参加するもので、我々には関係がないと長年思っていましたので（この誤解は私達だけではないと思います）、初めはあまり気が進みませんでした。教会関連の修練会だから、修道院のミニチュア版かと大変緊張して門をくぐりました。しかし、実際はその逆で、合唱し、談笑し、久しぶりに華やいだ気分です。合宿生活を楽しみました。そして、神父様と先輩ご夫婦のチームカップルの助けを借りて、夫婦自身の手で「イエスが二人と共に在す」ことを実体験出来ました。

以上は今から三年前の昭和六十三年六月の思い出です。それまでも、ME経験者の友人、知人に毎回参加を薦められてきましたので、MEについては若干の知識を持っていました。

しかし、「離婚の危機」とか「対話の必要性」とか、我々夫婦には関係のない世界の話のような気がして、ただ聞き流しておりましたが、その年は参加の勧誘を受ける前から、是非参加してみたいと思っていました。そして、そこでの経験は大変強烈なものでした。自分自身が生まれかわったような、若き日の洗礼の恵みに与った時に匹敵する位に感動しました。この時の感激と共に、夫婦生活の歯車が微妙に狂いだした時の苦い体験が時々思い出されます。

結婚以来、十数年共働きの生活を続けて来ましたが、お互いの職場の仕事が忙しくなり、家庭のことや子供のしつけ・教育がおろそかになってきました。特に、長女が高学年に進むにつれて、勉強や生活面で遅れが目立つようになってきて、親身になって世話する家庭教師的存在が必要になり、妻は数年前に長年勤めてきた看護婦の職を辞しました。当初、妻は今まで手抜きしてきた家事や子供の世話にはりきっていましたが、私も妻が専業主婦になった

のだからと、遠慮なく仕事が出来ると思い、益々仕事にのめり込んでいきました。

一年、二年とたつうちに、私にとって、家は単に眠りに帰る下宿屋のような存在になっていきました。妻とも、子供達ともほとんど対話する機会もなくなっていました。一方、妻も当初考えていたようには家庭のことも、長女のことにもスムーズには進展しませんでしたので、いろいろ悩みを持つようになっていきました。私に相談しようとしても、夜は遅くしか帰宅せず、朝はぎりぎりまで寝ていて、朝食早々に出勤してしまつたため、次第に妻も相談したり、話しかけて、自分の悩みや思いを分かち合つてもらいたいという気持ちも失せてしまい、毎日一人でイライラするようになっていきました。

他方、私も仕事に没頭してみたものの、若い時のようには能率が上がらず、次第に疲労もたまってきて、妻に何か相談されても考えてみるのもいやな気分になっていました。その上、共働きの時には妻も仕事と家事に大変だから

と我慢していたようなことが、妻への要求として遠慮なく口から出てしまい、それが場合によっては、妻の生活態度に対する批判へと発展してしまうこともありました。

いつの間にか、互いに自分のことばかり主張しあって、相手を思いあう気持ちなどまったくなくなってしまうていました。

こんな状態から抜け出したいと思って、今まで余り気の進まなかったMEに是非参加してみたいと急に思い立ちました。同じ教会の熱心なご夫婦の影響も多分になりましたが、今になってみると、神様の御導きを強く感じています。

新潟地区では丁度七回目のME開催で、新潟教会を会場にチームカップルご夫婦三組と参加者夫婦三組という恵まれた環境でスタートしました。チームカップルのユーモア溢れるオリエンテーション、有意義な講話。指導司祭の適切な助言。妻と二人で繰り返し返した真剣な内省と対話。結婚以来、こんな

に深く、しかも長時間二人だけで話し合ったことは絶えて久しいことでした。特に子供が生まれてからは毎日がただ惰性のままに矢のように過ぎていきました。話題といえば子供のこと以外にはなく、夫婦とは何なのだろうかと思うことも度々ありましたから、この内省と対話は私達にとって大変新鮮でしたし、感動しました。妻の指摘も素直に受け入れることが出来ました。何時の間にか他人の話には批判的になっても、心より受け入れることを忘れてしまっていた私には、これは驚きでもありません。

私が、この初めて参加したMEで得た最大の収穫は長い間二人で共に生活してきていながら、「妻の気持ちを察する」という努力を何時の間にか忘れてしまっていたということに気がついたことでした。「相手に変化を望む前に、自分が先ず変わらなければならぬ」と深く自覚しました。

この感激の中で、「夫婦二人だけの対話の時間」と「家族の祈りの時間」をとることを一大決心しました。チームカップルからも「大変素晴らしい決

心をされました。しかし、それを継続することはもっと大変ですよ。頑張ってください。」と励まされました。

ところが、この決心も仕事の多忙を理由に数カ月しか続きませんでした。チームカップルの予言はまさに的中しました。それ以来、決心を再確認する目的で毎年参加しています。

確かに、最初の時ほど感動をおぼえなくなりましたが、MEの精神が次第に分かってくるような気がして、一年一回のこの日を毎年楽しみにするようになっていきます。

もっとも、以上のような模範解答的気持ちも十分にありますが、もうちょっと実利的、ご利益的、現世堪能型の発想によりMEに参加しているところもあります。華やかな貴族文化が栄えた平安朝の御代には「やんごとなき方々」が参籠と称してたびたび寺院に籠ったと聞いています。せめて、この忙しい平成の御代でも一年に一回位は大昔の雅やかな習いに浸ってみる贅沢も

一興という気持ちになった訳です。子供だ、じいちゃん・ばあちゃんだ、仕事だ、上司だ、なんだかんだいろいろの「しがらみ」に雁字搦めの日常生活から脱出して、愛する奥様または旦那様と二人だけで信仰ざんまいの生活を送れる場所はここしかないのでは？　と思っています。

MEそして今の私達

山野井 正昭・富美栄

私達が初めてマリッジ・エンカウンターに参加したのは、昭和五十二年の十一月でした。

結婚当初、二人とも信仰を持っていなかった私達が、このエンカウンターに参加するきっかけとなったのは、子供が通っていた幼稚園の、あるシスターからの勧めでした。

エンカウンターに参加するまで私達は、仲のいい何の問題もない夫婦だと思っていました。が、それまでの私達は、お互いの思いがバラバラで、それぞれが別々の方向に歩もうとしておりました。

そして、一致した成長した家族になるためには、家族の一人一人がイエズ

ス様の愛に沿って生きていくことが必要だと気付くことができ、私達家族の信仰生活がスタートすることになりました。

エンカウンターに参加して、あらためて自分自身を見つめたときに、それまでの自分が生い立ちに影響され、精神的に傷付き、知らないうちに、自分を愛せなくなっていたことを発見することができました。

『神様は、人間の屑を作らない』というみ言葉に出会ったとき、私達にとっては、とても嬉しいことでした。

それまで自分達は、長所に気が付かず、自分勝手に、わがままな欠点だらけの人間だと思えなかったからです。

ですから、私達にとってこの2日間の体験は、エンカウンターの意味の通り、『出会いと発見』そのものでした。

神様が云われていた様に、自分自身を知らなければ、本当の自分を相手に分かち合えないこと、そして自分で自分を愛せなければ、相手をも愛せな

いことに気付き、自分自身を愛せる様になるには、本当の自分と出会うことが大切であることに気付くことができました。

初めのうちは、自分の短所を見つめることは嫌で、受け入れがたいものがありました。段々とそれを直そうという意識を持つことが出来る様になり、また、自分の長所も知ることができ、それをより伸ばす様に意識する様にも変えられて来ました。そして、そんな自分を、相手に分かち合うことにも、自然と慣れて来ました。

また、このエンカウンターの中で、神父様から通じ合いの大切さを教えていただき、MEの精神である『お互いにオープンで、心を伝え合う』様に努力をして来ました。

時には、私達はお互いに弱いですから、世間的な価値観に左右されて、自己中心的になったり、忙しさや、面倒くささから、耳を傾けない時もありましたが、それでもこの十四年間、日常の小さなことから対話し、その積み

重ねで、お互いの信頼が深まってきたと思っております。

私達の結婚生活も、幻想・幻滅・喜びの繰り返しでしたが、同じところで足踏しているのではなく、少しずつ一致に向かって成長してきたと思います。エンカウンターに参加する前は、夫婦が成長するなんていうことは、考えたこともありませんでした。

でも今になって、あらためて振り返ってみますと、確かに十四年前の私達と今の私達とは、価値観も変わってきましたし、親密さも深まってきたと思います。

そして、否定的な価値観に影響されたり、誘惑に陥りやすい環境にいても、なんとか夫婦で、また家族で支え合い、励まし合うことができるようになり、大きな問題になる前に、小さいうちに解決することができました。

また、エンカウンターによって、結婚には神様の御計画があるということも知ることができました。

私達一人一人は弱いですから、人間的な努力だけでは限界があります。ですから、私達家族の中にイエズス様を迎え入れなければ、本当に一致した家族になることはできないことを感じました。

家庭生活の中では、いろいろな問題が起きてきます。

会社での悩み、家族の誰かが病気のと看、対人関係での悩み、嫁姑の問題、子育てや子供の進学、将来の計画、家族の争い、間違つた価値観に生きてきたとき等々、本当に限りなく問題が起きてきました。

私達だけの考えでは解決できず、間違つた方向に進んでしまう危険も沢山ありました、そんなとき、婚姻の秘跡の中にいらっしゃるイエズス様の方によって、助け導かれて来ました。

まだまだ、世間的な価値観に押し流されてしまう弱さがありますが、それでも『愛に生きる』という価値観によって、その不安も今は救われております。

そして、子供達に対しても、私達の弱い部分を分かち合ってきたことで、かえって親密さを感じてくれる様になり、家族の一人一人は弱くてもお互いが支え合うことで、問題が起きても、よい方向に変えられることを知ることができました。

これからも、いろいろな問題に出会うと思いますが、今、私達はそれを解決し、乗り越える方法を知っています。

エンカウンターの中で出会った『イエズス様と共に歩む』、それが私達家族のみちしるべだと確信しております。

感謝の手紙

小原 恵利子

前略

岡先生……。いろいろと本当にありがとうございます。ことばでは、言いつくせない程の喜びで胸がいっぱいです。お祈りをしていただいたおかげで、今の自分がいます。あの時、主にいやして（心の）いただいたから、今のわたしがここにいます。心から感謝しています。そしてもちろん、この大きな神の力に感謝でいっぱいです。ありがとうございます。何回頭を下げても足りない程感謝感謝です。岡先生もダナン神父様も「大丈夫。ご主人はきつとくるよ。」って、おっしゃってましたね。私は、あの時、正直言って、来るわけない……。と思っていました。

エンカウンターは、来た時から涙ばかり出て、押さえるのに苦労しました。となりにいる主人が別の人ではないのか？　なんて疑ってしまう程、不思議でした。

主人は、二泊三日の一日ごとに変わりました。こんなに、人間て変わるものかと感心してしまいました。

最初のうちは、部屋に帰ると、「酒はないのかな？」とか「クリスチャンの人はいいけど、オレたちには質問を変えてくれればいいのになー」などと言っていました。それを言ったすぐあとに、まるで神父さまが聞いていたかのように、クリスチャン以外の人の質問とわけてあるプリントをくばられて、主人もあぜんとしていました。主人が何か言うのと、すぐに、次の講話でその答えを自然と神父さまがおっしゃるので、私も、主人も、おどろきましました。

三日めは、主人も、朝から涙が出ていました。

主人は、すっかり変わってしまいました。わたし自身も変わりました。特に、主人を見る目が変わったような気がします。

主人の心の中に熱いものが流れてて、とてもステキに見えました。

家についてから子供を抱きしめて、主人はポロポロと涙を流してました。私も、神に感謝の涙が止まりませんでした。

この二泊三日のできごとは、私にとっても主人にとっても、かけがえのないすばらしい日でした。今まで生きてきて、これ程の喜びに出会ったのは、初めてのような気がします。

これから、また、苦しい時があるかも知れませんが、お互いに思いやりを持ってくらしていこうと二人で話し合いました。ほんとうに、ありがとうございました。

平成二年十一月五日



マリッジ・エンカウンター、リ・エンカウンター、マリッジ・レトルノ
のチームの全国大会

1991年5月 栄光学園にて